

—泉貨紙が出来るまで—

原料となる楮から
「泉貨紙」になるまでの工程を紹介します。

① 水浸漬

仕入れてきた原料となる「楮」の樹皮を、一晩水に漬け、繊維を柔らかくします。



② 煮熟(かじたき)

一晩水に漬けた樹皮を、一度石灰水に潜らせた後、その石灰水で約3〜4時間煮続けます。

この工程によって、植物繊維を固めている樹脂を、溶け出しやすいものへと変質させます。



③ 川さらし

煮熟した樹皮を広見川へと運び、石灰を洗い流します。

その後、数日間、川の中(流水)にさらして樹脂を溶け出させ、植物繊維を取り出します。この日数によって、泉貨紙の白さが決まります。



④ ちり取り

ここまでの工程で取りきれなかった「ごみ」を一つ一つ手作業で取り除いていきます。「ごみ」が残ることによって泉貨紙の品質にも関わってくるため、何日も時間をかけて丁寧に取り除いていきます。

この作業が泉貨紙作りの8割を占めると言われており、紙漉ぎが始まってからも「気が付けば取り除く」が繰り返されます。



⑤ 打解(たたき)

ちり取りが終わった繊維を、ビーターと呼ばれる機械で粉碎します。

このとき、前シーズンに漉いた紙を少量混ぜることで、品質を安定させます。

